

落語をテーマとした倫理学習

—— 仏教・落語・生命の三題噺 ——

麴町学園女子高等学校 小泉博明

1. はじめに

「えー。今回もあいかわらずの拙文を、ご披露申し上げます。よろしくお付き合いの程を。」

日本の伝統芸能は、その成立過程において仏教との関連が深いことは、言うまでもない。仏教の「^{しょうみょう}声^{ふしだん}明^{ふしづけ}」や「節談説教」(節付説教)は、布教のためであり、本来は芸能として発生したものではないが、謡曲・浄瑠璃・琵琶歌・落語・講談・浪曲から現代の演歌に至るまでの日本の伝統芸能の源流となっているのである。節談説教とは、僧侶がことばに抑揚をつけ、洗練された美声と絶妙な節まわしで、歌うがごとく語るがごとく、滔々と弁じるものである。(1) また、華道・茶道も同様に仏教との関連が深く、日本文化の底流を脈々と仏教が流れていることを、生徒に気付かせ、興味を喚起したい。

源信の『往生要集』は、地獄や極楽を説いたために、後世の説教や民間の芸能に大きな影響を与えた。とくに、冒頭の地獄の様相は、地獄を八つに分け、あまりにも凄惨であり、庶民に「厭離穢土、欣求浄土」を渴望させる。また、平安末期から鎌倉にかけての名説教(説経)者として、澄^{ちようけん}憲^{せいかく}とその子聖覚は名を残した。彼らは、説教こそ衆生済度の最高の手段として、熱弁をふるったのである。父子ともに、京都の一条北小路大宮通の安居院^{あぐいん}に住んでいたので、「安居院の法印」と呼ばれ、浄土宗では聖覚を「説経念仏の祖」として尊敬した。この説教の流れを「安居院流」という。そして、法然(源空)による念仏の教えは、安居院流の卓越した説教により、庶民層への弘通^{くわうつう}に大きな役割を果たし、庶民層の絶大なる支持を得たことは見逃せない。

各宗とも説教を行っており、日蓮宗でも盛んであるが、安居院の系を引く浄土真宗の説教と芸能との関わりは深い。親鸞の『三帖和讃』の七五調の韻律は真宗独特の節談説教を構成に大きな影響を与え、「弥陀の名号となえつつ 信心まことにうるひとは 憶念の心 つねにして

仏恩報ずるおもいあり」⁽²⁾などとなえる場面があった。さらに、蓮如による「講」の組織は、江戸時代には庶民の娯楽の場ともなっていた。

さて、このように仏教をひろげるための説教が、古典落語の淵源となっているのである。例えば、「菟菟問答」は禅問答が素材であり、「野ざらし」では「盛者必滅会者定離頓生菩提南無阿弥陀仏」という回向のくだりなど、仏教と関連する演目が少なからずある。そし

て『醒醉笑』という滑稽話をつくった京都三条誓願寺の安楽庵策伝（1554~1642）は、浄土宗の説教者であり、「不世出の咄上手」などといわれ、落語の始祖と伝えられている。その内容は、庶民的な面白さがあり、後世の落語のテキストとなっている。とくに策伝の説教には、話の末尾にサゲ（落ち）をつける滑稽話の特徴となっている。例を挙げると、次のような内容である。

ある寺に小僧がいた。夜がふけてから長い棹を持って庭をあちらこちら振りまわしながら歩いていた。住職がこれを見つけて、「これ、なにをしているのじゃ？」

「空の星がほしいので、うち落とそうとしていますが、どうしても落ちませぬ。」

「さてさて、お前は馬鹿なやつじゃなあ。そんなに頭が悪くてどうするのじゃ。そこからでは棹がとどかないだろう。屋根へあがれッ！」⁽³⁾

親鸞・道元・日蓮だけではなく、日本仏教の学習のなかで落語に目を向けたアプローチも可能ではないだろうか。落語に登場する浮世噺・人情噺には、さまざまな欲望うずまく人間の姿が余す所なく描かれ、また生老病死が語られるのである。本稿では、とくに生死に関わる内容を3つ取り上げることにする。

2. 落語を素材とした事例

(1) 寿限無—無病息災・健康至上主義

数ある演目の中で、「寿限無」は、最も人口に膾炙するものであり、『無量寿経』に由来する。念のために、あらすじを記すと、神田に住む熊さん（熊五郎）に男の子が生まれたので、子どもの健やかな成長と、長命を願い、寺の住職によい名前をつけてもらおうと思い相談に行った。

「そうそう忘れてた。名前をつけなくちゃあいけねえ…なんかこう強そうな方がいいんだが…

どうだい、金太郎てえのは？…ライオン太郎はどうだい？」

「どうもおまえさんじゃ、いい名前をがつけられそうもないから、お寺へ行って和尚さんにつけてもらおうといいよ。檀那寺で名前をつけてもらおうと長生きするというから…」

いくつかの名前を紹介してもらおうが、どれも捨てがたく、すべてを名前にしてしまった。そこで、こういう長い名前となったのである。

寿限無 寿限無 ^{ごこう}五却のすりきれ 海砂利水魚の水行末 雲来末 風来末
食う寝るところに住むところ やぶらこうじのぶらこうじ パイポパイポ
パイポのシューリンガン シューリンガンのグーリンダイ
グーリンダイのポンポコピーのポンポコナーの長久命の長助

(寿限無とは、寿命が限り無しである。一却とは、三千年に一度、天人が下界に降り、岩を衣でなでるが、その岩をなでつくして岩がなくなるまでの気が遠くなるような時間である。海の砂利、水に棲む魚は取り尽くすことがないのでめでたい。水の行く末、雲の行く末、風の行く末、いずれも果てしなくめでたい。やぶらこうじのぶらこうじとは、丈夫なめでたい木である。

唐土にパイポという国があり、王様のシューリンガンと王後のグーリンダイとの間に、ポンポコピーとポンポコナという二人の姫が生まれ、この二人が大変長生きしたということである。)

さて、子どもにこのような長い名前をつけると、いちいち名前を呼ぶのが大変である。この子が成長すると、大変いたずらで腕白となり、いつも友だちを泣かしていた。ある日、頭をぶたれたのでコブができた、泣いてきた子どもがいた。

「じゃあなにか、うちの寿限無……長助が、金坊の頭にこぶをこしらえたっていうのか。金坊、どれ、見せてみな、頭を。なーんだ、こぶなんざあねえじゃあねえか。」

「あんまり名前が長いから、こぶがひっこんじやった。」というのがサゲである。(4)

さて、サゲは演者により、変更されている場合もあるが、この噺からいつの時代でも、親が子どもの健やかな成長と、さらに長命を願う心情が伝わってくる。しかし今では、出生前診断(胎児診断)により、出生前の胎児の状態を診断することが可能となり、さらに遺伝子診断は、より多くの疾患のスクリーニングが可能となり、性格や身長、容貌までも予測可能となるという倫理的な問題を提起している。「無病息災」の徹底がはかられ、健康至上主義へと邁進していると指摘があるとおりである。それは、社会から送られてくる「スリムであれ」「清潔であれ」というメッセージであり、命令でもある。さらには、他者との接触の回避への願望へと発展していく。「スリムであるということ、つまり無駄のないことというのは、若いこと、美しいこと、健康であること、新品であることとならんで、自由で誇りある人間であるために必要なことではない。」(5)ことは言うまでもない。

また、日本では平均寿命が年々伸びるなかで、QOL が叫ばれ、延命治療を拒絶する尊厳死や安楽死などのターミナル・ケアのあり方も問題となっている。

ところで、江戸時代には、子どもの健やかな成長を願う一方で、飢饉に悩む農村において墮胎・間引きも行われていた事実を見逃せない。近世では、出生前「胎内に居る時」に「おろし」「流し」「流産」させる墮胎と出生後の「赤子」や「子」を殺す間引きとは、一応区別されている。沢山美果子の津山藩(岡山県)を事例とした研究では、藩は人口増加策として「赤子間引取締」を行い、村のなかで妊娠している妻や娘を毎月調べ、妊娠4カ月になると「懐胎届」を出させ、村役人が「懐胎届書上帳」に書き残す。つまり、妊娠中に墮胎することがないように村全体が見守る方法がとられている。そして、陣痛が始まると、産婦の父や夫が産所見届人をはじめ、隣家・組合の者に知らせ、それらの人々は間引

きをしないように、出産を見届ける。また妊娠中の流産や死産、生後すぐに死亡の場合は、不審がないか調べ、もし不審が分かれば、主人をはじめ庄屋、組頭、五人組にも罪科が及んだ。また、「間引き教諭書」もつくられ流布された。(6)このような執拗な徹底した藩による出産管理は、むしろ当時の墮胎・間引きの実状を窺い知ることができるのである。

(2)らくだ—飼いなされた死・死への共鳴

身体が大きく、動作が緩慢であるので「らくだ」というあだ名をつけられた男の家へ、兄貴分が訪れたが、当人は前の晩に河豚を自分で調理して食べ、毒に当たり死んでいた。そこへ、長屋へ出入りの屑屋が登場するが、葬式費用に家財道具を買えとせまり、断られる。そこで、

兄貴分は屑屋に、長屋の月番の家へ町内の香典集めを頼みに行かせ、さらに大家には通夜の酒と料理を用意させるように言いつけた。大家は吝嗇で、「らくだ」は家賃を滞納しているので、らくだの死体をついで行き、大家に酒と料理を約束させる。次に、ほっとする屑屋に棺桶用の樽を八百屋でもらってこいと催促され、桶とかつぐための縄まで調達する。

さて、長屋では香典と酒と料理が用意されている。兄貴分に酒にすすめられ、帰りたい一心で酒をうけた屑屋は、杯を重ねるうちに人が変わり、威勢がよくなり、泥酔する。そのうち、寺がわからないので火屋（火葬場）へ、直接持ち込むことになる。酔っぱらった二人が、「らくだ」を入れた樽を天秤棒にぶらさげ担ぎ、火屋へと向かうが、途中で樽の底が抜けて死体を落としたが全く気がつかない。火屋で言われ慌てて、探しに戻る。

「あっ、こんなところにいやがった。」これが酔いつぶれて寝ていた坊主であったが、「らくだ」だと思い込んで、お構いなしに樽へ入れ、縄でよく縛り火屋へ行く。窮屈な姿勢で樽に入れられていた坊主が目をさまし、「いてて、痛いよ。ここはどこだ。」「火屋だ。」「ああ冷酒でもいいからもう一杯」がサゲである。(7)

死んでしまった「らくだ」は、一言も話さないが、その「らくだ」の人間像が演者により、あたかも生きているがごとくに、感ぜられるところが聞きどころである。現代は死はタブーであり、多くが病院死となっているが、かつてはこの演目のように死は身近なものであった。「昼の上で死ぬ」は、もはや死語となっているのであろうか。

フランスの歴史家のフィリップ＝アリエスは、中世から現代までのヨーロッパにおける死の概念や死に対する態度を歴史的に明らかにした。アリエスは、現代は死を社会のあらゆる所から隠蔽しようとし、遠ざけているとした。それに対し、中世は死と慣れ親しみ、身近でなごやかで、たいして重要ではないという態度をとった。そして、このような死を「飼いなされた死」といった。中世の死は個人の問題ではなく、共同体のものであり、人は共同体のなかで自然に死んでいった。(8)まさに、「らくだ」の死はこのような死ではな

いだろうか。しかし、ヨーロッパでは1438年にペストが大流行すると、「メモリー」ということばが流行し、自然なものとして受容された死を、過剰に意識するようになったのである。

小松美彦は「ある者が死に瀕しているとき、生物学的に死にゆくのはもちろん当人である。しかし、…その場面に存在するのは、死にゆく者だけではない。渾身の力をふりしぼって最後の最後まで治療を続ける医療スタッフ、さまざまな思いをいだきつつその様子を見守る家族・友人・知人もまた存在する。あるいは家族や知人だけが必死の看病に専心している場合もあるだろう。そこでは、死は決して死にゆく者個人だけにかかわる問題ではなく、その者に死は帰属していないのではあるまいか。死ぬのは当該の個人であっても、たとえ周囲の者が死はその個人だけに訪れると思っただとしても、事態としては死亡は死にゆく者とその場に集う人々との間で分かちあわれ、そこにおいて死は両者の関係のもとにはじめて成立しているのではないだろうか。」⁽⁹⁾とし、「死は共鳴する」という。

ところで、江戸幕府にとって、内憂外患の時期である1858年（安政5）に江戸でコレラが大流行し、「安政のコレラ」と呼ばれた。死者は推定10万人余とも26万人とまで言われる。

仮名垣魯文は『安政^{ころり}筋癩流行記』で、大江戸八百八町のパニック状態を「葬礼の棺、大路小路に陸続きで、昼夜を棄ず、絶ゆる間もなく、御府内数万の寺院は、何所も門前に市をなし、焼場の棺、所せきまで積ならべて山をなせり。」と記した。⁽¹⁰⁾このルポルタージュの火葬場の混雑ぶりを描いた挿し絵には、「らくだ」が入った樽型の棺桶が所狭しと並べられている。

(3) 死神—死への存在

金に縁がなく、首をくくる寸前の男の前に、杖をついた瘦身の老人が現れた。老人の正体は死神であった。死神は男に金儲けを伝授した。

病人に必ずついてくる死神さえ見えれば、その病人の生死が判明するという。男は死神が見えるまじないをかけられ、医者をはじめのように薦められる。死神が病人の枕元にいたら、病人は治癒されない。足元にいたら、病人は全快するので、手を二つたたき死神を追い払えばよいと言ひ残し姿が消える。男は早速、医者看板を出すと、うまいぐあいに、死神が足元に座っている。呪文をととなえ、手をたたき、死神がいなくなり、あっという間に病人が元気になった。

これが評判となり、男はたちまち名医にまつりあげられ、都合のいいことに、どこへ行っても死神が足元に座っていて、病人は全快である。大金持ちとなり、豪遊するようになる。ところが、今度はどこへ行っても死神が枕元に座っている。困っていると、江戸でも屈指の大金持ちから使いが来て、大喜びで出かけたが、病人の枕元に死神が座っていた。

男が「助かりません」と言うが、礼金が1万両と聞くと、一計を案じた。死神が居眠りしている隙に、若者四人で寝床をくるっと廻し、死神は足元へ移った。すかさず呪文をとえ、手をたたくと、死神は消え、病人は全快した。

しばらくすると、最初の死神が登場し、「どうしてあんなことをした。」と、男を穴ぐらへ連れ込んだ。穴の中には、人間の寿命を表す蠟燭が並んでいる。男の蠟燭は助けた病人のものに入れ替わって、消えそうになっている。「助けてくれ。」と男が頼むと、死神は蠟燭をつなげという。男は手が震え、つなげない。「早くしろ。」と死神がせかす。「あぁーっ、消える。」で終わる。(11)

最後に人の生命を蠟燭の炎に譬え、風前の灯となった寿命を継ぎ換えようとする仕草は、一瞬、思わず胸が締め付けられる戦慄に襲われる。

ところで、人間が誰もがもつであろう死への恐怖に対し、良寛の次の手紙は有名である。「災難に逢ふ時節には災難に逢ふがよく候。死ぬ時節には死ぬがよく候。是はこれ災難ののがる妙法にて候。」これは、三条大地震の時に、友人の山田杜^{とこう}阜にあてた手紙で、良寛の死の二年前にあたる。死神をだました男はこの手紙を、どのように捉えるだろうか。

文豪トルストイの短編『イワン・イリッチの死』は、死に直面し、死とどのように向きあうかという問題を、特定の宗教に限定せず、文学というフィルターを通して学べる恰好の教材である。イリッチは死にゆく過程で動揺し苛立ったり、絶望し、自らの人生を否定したりする。また、この絶望をどのように乗り越えようかと考える。最後は臨終の場面である。

「いよいよお終いだ！」誰かが頭の上で言った。彼は、この言葉を聞いて、それを心の中で繰り返した。「もう死はおしまいだ」と彼は自分で自分にいい聞かした。「もう死はなくなったのだ。」彼は息を吸いこんだが、それも途中で消えて、ぐっと身を伸ばしたかと思うと、そのまま死んでしまった。(12)

ところで、一般の家庭でもかつては、往診が比較的行われていた。昭和30年代には「おでこには氷嚢、頭には水枕、これで冷やして、上がった熱をとるしかない。やってきた白衣の先生は聴診器を胸にあて、軽く手を拳固にするとトントンとたたく。

そして、付きそってきた看護婦さんから、おもむろに注射器を受けとり、腕やお尻にうたれた。そのとき普段のわが家にはない、消毒液の匂いが一瞬流れる。あの消毒液の匂いだけで、もう大丈夫という気分にあせるのが、さすがお医者さんの威厳というものだろうか。」(13)

と記されている。今では家庭で病人を看病する光景が少なくなっている。氷枕や氷嚢はどこへ消えたのだろうか。今や、家に出向く死神退治の商売など成り立たない。

3. まとめ

高校生が本格的な古典落語を楽しむ機会はあるのだろうか。テレビは〈話芸〉ではなく、〈トーク〉であり、じっくりと話を聴くのではなく、何かをしながら、聞き流すものなのである。

しかも笑いの中味が、嘲笑や批判といった他者への配慮を欠くものであったりし、ほのぼのとした笑いが喪失しているような感じさえする。

そして、若手による漫才師の活躍があるのだろうが、所謂〈色物〉が中心となり、高校生には伝統芸能の落語とはあまり縁がないようである。古典落語は、伝統と先人の磨きぬかれた名人芸により支えられ、継承されてきた、国民の文化的遺産ともいうべきものであり、その真髄にふれる機会をつくるのが肝要であると思う。落語は、大道具もなく、小道具として扇子と手拭いを使用するだけではあるが、事前学習をすればビデオで鑑賞するよりも、テープで聴くほうが、より効果的な授業がのぞまれるであろう。

例えば、落語には「横丁のご隠居」(大家)が、地域住民(店子)の悩み事の相談を受けたり、有用な知識を伝授する場面が、数多く登場する。まさに、老熟・老成・老実などと言われるように、老いをポジティブに捉え、老いの価値を髣髴させるものである。

国立演芸場⁽¹⁴⁾の舞台には「喜色是人生」の額が掲げられている。「われ笑う、ゆえにわれあり」ではないが、「笑い」のない人生に人間は耐えうることはできないであろう。『呪われた部分』で著名なバタイユは、「笑いは、効率や有効性の観念によって支配される現実社会の諸原則からの逸脱であり、真の人間性への解放である」と主張した。⁽¹⁵⁾さて、仏教・落語・生命の三題断でまとめたつもりであるが、ここらで紙数も尽き、「お後がよろしいよう」なので擱筆する。

(註)

(1) 関山和夫『説教の歴史－仏教と話芸－』岩波新書，1978年，pp.2～3

(2) 名畑應順校注『親鸞和讃集』岩波文庫，1976年，P.9

和讃を利用した学習も有効である。「恩徳讃」は、親鸞の『正像末和讃』を作曲したもので、有名である。「如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし 師主知識の恩徳も骨を砕けても謝すべし」(同上，p.181)

(3) 前掲『説教の歴史』p.101

(4) 興津要編『古典落語』下・講談社文庫，1972年，pp.34～45

(5) 鷲田清一『ちぐはぐな身体－ファッションて何?』ちくまプリマーブックス，1995年，p.128

- (6) 沢山美果子『出産と身体の近世』勁草書房, 1996年, pp.250 ~ 251
(詳細については、太田素子編『近世日本マビキ慣行史料集成』刀水書房, 1997年
が参考となる。)
- (7) 興津要編『古典落語』(下) 講談社文庫, 1972年, pp.384 ~ 421
- (8) フィリップ・アリエス『死と歴史』みすず書房, 1983年, pp.15 ~ 32
フィリップ・アリエス『死を前にした人間』みすず書房, 1990年, pp.1 ~ 23
- (9) 小松美彦『死は共鳴するー脳死・臓器移植の深みへ』勁草書房, 1996年, p.218
- (10) 吉村昭『歴史への招待 16ー安政コロリ大流行』NHK出版, 1981年, p.145
- (11) 麻生芳伸編『落語百選』(秋) ちくま文庫, 1999年, pp.384 ~ 399
滝田ゆう『滝田ゆう落語劇場』ちくま文庫, 1988年, pp.227 ~ 238
- (12) トルストイ 米川正夫訳『イワン・イリッチの死』岩波文庫, 1973年, p.102
- (13) 奥成 達『昭和子ども図鑑』ポプラ社, 2001年, p.211
- (14) 場所は国立劇場の隣、東京都千代田区隼町4-1(毎月、上席・中席があり、他の演
芸場よりも料金も格安である)
- (15) 『哲学・思想事典』岩波書店, 1998年, p.1768

(参考文献)

- 興津 要編『古典落語』(上・下・続・続々・続々々・大尾) 講談社文庫, 1972年
- 麻生芳伸編『落語百選』(春・夏・秋・冬)『落語特選』(上・下) ちくま文庫, 1999年
- 矢野誠一『古典落語』駸々堂双書, 1979年
- 立川志の輔『古典落語百席』PHP文庫, 1997年
- 桂 米朝『落語と私』ポプラ社, 1975年
- 石井 明『落語を楽しもう』岩波ジュニア新書, 1999年